

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-132	16-009	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)		
<p>Moderate alcohol drinking in pregnancy increases risk for children's persistent conduct problems: causal effects in a Mendelian randomisation study.</p> <p>妊娠中の適量飲酒は子供の持続性行為障害のリスクを上昇させる：メンデルランダム化研究による因果効果</p>		
執筆者		
Murray J, Burgess S, Zuccolo L, Hickman M, Gray R, Lewis SJ.		
掲載誌		
J Child Psychol Psychiatry. 2016 May;57(5):575-84. doi: 10.1111/jcpp.12486.		
キーワード		PMID
胎児性アルコール兆候、行為障害、縦断研究、メンデルランダム化解析		26588883
要 旨		
目的：		
妊娠中の過量飲酒は胎児に重大な発達障害を及ぼす。本研究は、妊娠中の適量飲酒が胎児の行為障害に与える影響について、メンデルランダム解析を用いて検討した。		
方法：		
The Avon Longitudinal Study of Parents and Children (ALSPAC) に参加した 3,544 名の妊娠 18-32 週の女性を対象に自記式アンケート調査を行い、その後 13 年間追跡した。適量飲酒は、アルコール摂取 0-6 単位/週とした。行為障害は、胎児が 4、7、8、10、12、13 歳時に Strength and Difficulties Questionnaire (SDQ) に基づいて評価し、低リスククラス、小児期限定クラス、青年期発症クラス、早期発症および持続クラスの 4 群に分類した。小児の遺伝子多型はアルコール代謝関連遺伝子 ADH1A (rs2866151, rs975833)、ADH1B (rs4147536) および ADH7 (rs284779) を選択し、リスクのある対立遺伝子数別 (2 ≤, 3, ≥4) にカテゴリー化した。多変量ロジスティック回帰分析により、リスク遺伝子数と行為障害との関連を、母親の飲酒別にオッズ比 (OR) および 95%信頼区間 (95%CI) にて算出した。		
結果：		
子供のリスク遺伝子数の増加は、母親が適量摂取した群において、早期発症および持続クラスの行為障害を有意に増加させた (OR [95%CI]=1.29 [1.04-1.60], $p = 0.020$)。しかしながら、飲酒しなかった母親において、それらの関連は認められなかった (OR [95%CI]=0.94 [0.72-1.25], $p = 0.688$)。その他のクラスの行為障害とリスク遺伝子数に関する関連はみられなかった。		
結論：		
妊娠中の適量飲酒は、子供の早期発症および持続性の行為障害を増加させることが明らかとなった。		